

顎関節部画像診断における CBCT の活用と問題点の検証

大和市 開業 井上 正敏

寿谷先生がお亡くなりになられて、早くも今年で3回忌になりました。寿谷先生の功績は素晴らしく、近年ようやく歯科界が、寿谷理論とシステムに追い付いてきたかと思われます。しかし、彼の功績の一つである、顎関節部の画像診断より得られた情報を、咬合器とリンクさせることのできる、個別経頭蓋側斜位撮影装置(サジタリウス 3000)は、現在入手することができなくなりました。その背景としては、昨今の歯科界における情報技術革新の展開にあります。アナログ画像診断全般を行う歯科医院が減少する一方で、デジタル画像診断を主に行う、特にCBCTを設置する歯科医院は増加の一途をたどっています。このことから、デジタル化へ完全に移行される時世も十分に考えられます。

そこで、今後の展望を考慮し、全般的な画像診断において、硬組織を3次元的に診ることができるCBCTを、臨床治療において積極的に顎関節部の診断に活用できないか、と考えています。しかし、アナログによる2次元画像に利点と欠点があるように、デジタルの3次元の画像においても、同様の問題はあります。デジタルの活用において、欠点となる問題を、完全になくすことができるか、あるいは、どこまで改善できうるか、また、改善できない場合は、どのように補うとよいか、等については、デジタルの展望における課題ではないでしょうか。

今回、同一症例において、CBCTによる画像を用いて診断した顎関節所見を、サジタリウス 3000による画像の所見と比較検討したものを提示いたします。試行錯誤の段階ではありますが、ご参加の皆様から、疑問点や改良点等のご提言をいただけたら幸甚に思います。